

昔々、2 人の子供を持つ親がいた。ひとりは娘でひとりは男の子だった。男の子は泥棒で女の子は勉学に励んでいた。

この村では、スルタンが、娘に結婚を申し込む者すべてを拒絶していた。或る日、その泥棒が町にやって来て、スルタンに美しい娘がいるが、求婚者が黄金の剣を持たなければ結婚を許さないということを聞いた。彼はスルタンに会いに行き行って言った。

「あなたには結婚させる娘がいると聞きました」。

「その通りだが、私には条件がある」。スルタンは条件を伝えた。

「それは問題ではありません。私は黄金で出来た同じ 4 振りの剣を所有しています」。

結婚式が執り行われ、泥棒の夫はスルタンに、妻を自分の村に連れて行く許しを乞うた。

ところで、その間、盗難に遭った人々が自分たちの財産がなくなっていることに気づいていた。スルタンは泥棒の夫に許しを与え、彼は妻を森の中に住ませたが、彼女は訳がわからなかった。

盗まれた人々はスルタンのところに行きこう述べた。

「我々があなたに会いに来たのは、我々は盗難に遭ったわけですが、あなたのごところに我々の財産があるという話を聞いたからです」。

スルタンは、もらった黄金は自分の娘の婚資であり、その夫はここにはおらず、娘を連れて家族のごところに連れて行った、と答えた。

泥棒が妻を住ませたところには隣人がいた。彼はしばしば娘が泣いて、歌いながら我が身を嘆いているのを聞いていた。或る日、隣人は泥棒が出かけたのを窺って若い娘に会いに行った。

「どうしたのですか？ 彼と何があったのですか？」。

「私は裕福な身でした。彼は私と結婚してここに連れて来たのです」。

盗難に遭った人々はスルタンのところから黄金を取り戻し、スルタンの娘は独り森の中に残された。